

令和4年度

試験名:学群編入学試験

【社会・国際学群社会学類社会学主専攻】

| 区 分 | 標準的な解答例又は出題意図 |
|------|--|
| 専門科目 | <p>社会的に流通し影響力のある「社会的ひきこもり」観を批判し、ひきこもり当事者にとっての意味に焦点を当てる「存在論的ひきこもり」観を提示した、芹沢俊介『「存在論的ひきこもり」論 – わたしは「私」のために引きこもる』からの文章の抜粋を読ませ、以下の2問の回答を求めた。</p> <p>問1 「社会的ひきこもり」観は、社会的役割を遂行する自己、「する自己」としてのみ人間を捉え、社会の側からまなざして「する自己」からの撤退としてのひきこもりを否定的なものと見なす。「存在論的ひきこもり」観は、「する自己」と「ある自己」の二重性として人間を捉え、「ある自己」の損傷ゆえに「する自己」から撤退して「ある自己」の崩壊を防ぎ、再生を模索する営みとして、ひきこもりの意味を当事者の視点から肯定的なものと見なす。これらの論点が指摘されていることを評価した。</p> <p>問2 「ある自己」を成り立たせている内なる「環境と他者」への信頼が失われ、「いまここにある」ことだけでいいのだという安心を感じてできなくなっていることに関連して社会学的な考察が展開されていることを評価した。例えば、個人化、他者との関係の多元化・流動化といった論点、原初的な信頼性が形成される場である家族自体の変容といった論点、「する自己」本位の社会であるがゆえに「ある自己」の危機に瀕した当事者の声が他者に届かないといった論点等々、様々な考察が可能であるが、社会学的な視点がしっかりと確保された考察であることを評価した。</p> |
| 外国語 | <p>社会学の代表的な入門的文章を選び編まれたリーディングスの第3版 Giddens, Anthony and Philip W. Sutton eds., 2010, <i>Sociology: Introductory Readings, 3rd Edition</i>, Polity. に収録されている文章から出題を行った。今回の出題では、ひとつのディシプリンでありながら研究テーマの多様性を特徴とする社会学をどのように捉えるべきかについて、入門者に説明している部分の文章を使った。</p> <p>問1 社会学がどのような学問であるかについて、それまでのやや抽象的な説明から平易な例を挙げた説明に移った部分の下線部全訳を問うことで、文の構造と意味が把握できているかを尋ねた。</p> <p>問2 学問としての社会学の把握に見られる多様性を対比的に列挙している文意・文章の運びが把握できているかを尋ねた。</p> <p>問3 社会学が対象とする代表的な諸領域を表す基礎的語彙を日本語の定訳に直せるかを問いつつ、基本的な文の構造と意味が把握できているかを尋ねた。</p> <p>問4 社会学の多様性を利点とみなす主張の根拠を問うことで、社会学の特徴を</p> |

述べる文意がとれているかを尋ねた。

問5 「社会についての科学」であろうとした社会学の主流にあった志向性を問うことで、「何のための社会学か」について述べる文意がとれているかを尋ねた。